

特集：農とレクリエーション

## 園芸療法とレクリエーション

瀧 邦 夫\*

### Horticultural Therapy and Recreation

Kunio TAKI

#### 1. はじめに

園芸療法は人が植物に接し、園芸活動を行うことから得られる効用（能動的側面）と、庭園を眺め、散策することによりもたらされる効用（受動的側面）を通して、我々に癒しを与えてくれる。

小稿は、まず園芸療法の概念、発展過程を概説し、続いてそれが活躍する場所と目指しているゴールを明らかにする。さらに、わが国の高齢化が進む社会の状況に目を向け、これからの社会におけるレクリエーション需要に対して、園芸療法の2つの側面がどのように対応することができるかについて考察する。

#### 2. 園芸療法の概念と発展過程

##### (1) 園芸療法の概念

園芸療法を既存の良く知られている概念との関係で説明すると、作業療法の中の一作業科目といえる。すなわち、作業療法とは「身体または精神に障害のある者に対し、主としてその応用的動作能力または社会的適応能力の回復をはかるため、手芸、工作、その他の作業を行わせること」である。

園芸療法に領域の近い概念に、イルカ・セラピーあるいはヒポセラピー（乗馬療法）がある。

イルカ・セラピー（Dolphin Assisted Therapy）は、自閉症や強迫神経症の子供とイルカが対等な遊びの場では会うことができれば、イルカが生まれながらにもっている資質（相手との絆を作る、遊ぶ、相手へ

の好奇心をもつこと）によって、子供に目標とする反応を徐々に身につけさせることや、まねることにより学習することを、一層効果的に達成することができる。

ヒポセラピー（Hippo Therapy）は、馬の助力を伴う療法を意味する。障害を持つ人が馬にまたがり、歩きながら馬の背中で3次元の揺れる動作に対し自動的に反応することから、筋肉の強化、可動域の拡大、バランスや調整の改善、注意力の持続時間の増加、言語発達の改善などのゴールを目指す。

これらは動物介在療法と総称され、「動物が橋渡しの役割を果たす」ものである。つまり、子供はまず動物との関係を作り上げてから、セラピストとの関係を作り、さらに、それ以外の人々へと関係の輪を広げていく訳である。

カナダ・バンクーバー島のダンカンにあるプロビダンス・ファームは、広大な敷地に恵まれ園芸療法とともに乗馬療法を採用している教育・訓練施設である。テキサス州ヒューストン市のさらに南に位置するガルベ斯顿市の教育・レクリエーション施設ムーディガーデンも、まず乗馬療法から出発し、続いて園芸療法を取り入れた施設として、数多くの障害者にあらゆる機会を提供している。

リハビリテーション医学を支えている技術分野は、大きく理学療法、作業療法、義肢・装具術、言語療法の4つに分けることができる。そして、リハビリテーションはおおむね3つのプロセスを構成している。最

\* (財)日本緑化センター Japan Greenery Research and Development Center

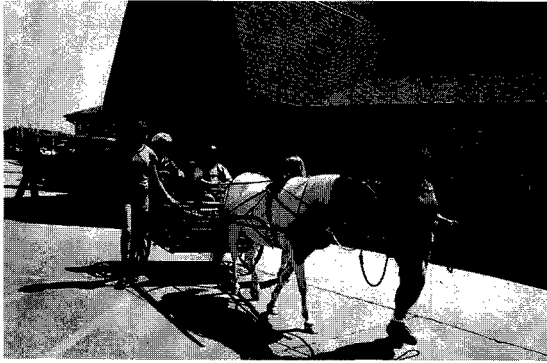


写真1 車椅子の子どもも馬車に乗り屋外を  
散策する (ムディーガーデン)

初が身体的リハビリテーションのステージで、身体的・心理的能力を發展させ、回復すること、例えば麻痺した筋肉の機能を回復し、弱った筋肉を強化する訓練を行う。

次が精神的リハビリテーションのステージで、とりわけ回復しない機能障害を負った場合に、何故自分があるいは自分だけどうして、といった精神的挫折感に陥ってしまう時期が必ず訪れ、そこから立ち直る、現実を受け入れる訓練を必要とする。

さらに、社会的リハビリテーションのステージがあり、若くして障害を持ち、やがて両親の介護からも離れて一人で生きて行くための技術と能力を身につける訓練を行うことである。

イルカ・セラピーやヒポセラピーが、これら3つのステージの1つないし2つに有効なものであるとするならば、園芸療法は身体的、精神的、および社会的リハビリテーションの3つすべてに対応し得るものである。そしてなによりも、身近に、しかも病院や施設から家庭に戻っても継続して取り組むことができるという点において、作業療法科目の中でとりわけ優れ、内容の深化、体系化が図られ、独自の領域を確立しつつある所以といえる。

アメリカ園芸療法協会は、「園芸療法は植物や園芸作業を身体、心、および精神の改善に必要な人々の社会的、教育的、心理的、および身体的調整に利用するプロセスである。園芸療法が効果を発揮すると思われる人々のグループとは、身体障害者、精神病患者、知的障害者、高齢者、薬物乱用者、犯罪者、および社会的弱者を含む。」と定義している。

## (2) 園芸療法の發展過程

植物やハーブの治療効果と人間の関わりは、少なくとも古代エジプト時代に遡り、その当時、医師たちは精神障害者に対して庭園の散歩を処方したことがあった。

園芸療法の發展過程を3期に分けて述べると、次のように整理することができる。

### 創草期 (18世紀から20世紀半ば第2次大戦まで)

主に精神障害者や精神薄弱者を収容している施設で、自給自足や患者の日課を目的にスタートした農作業が、治療効果にもつながることが認められはじめる。

1792年イギリスの精神病院ヨーク収容所でウサギやニワトリとの交流および庭仕事が導入(自然の持つ癒しの力)。

1812年Dr. Benjamin Rushは、フィラデルフィアの独立宣言の起草者で署名者、彼の著書“Medical Inquiries and Observations Upon Diseases of the Mind”の中で、精神障害を持つ患者に対し庭園の中で労働する利点について言及。

1879年に、精神病患者に利用されたグリーンハウスの第1号として知られているものが、PFAI(今日のFriends Hospital)によって建設。

### 変革期 (第2次大戦後から1970年まで)

アメリカで1940年代、連邦政府が傷痍軍人のケアに多数の新しい復員軍人病院(VA医療センター)を創設し、園芸を作業療法の一環として傷痍軍人のリハビリや職業訓練に導入したことが、園芸療法の再評価につながる。

それに対する解釈と応用範囲が急速な広がりを見せ、大学で園芸療法士養成講座(1955年ミシガン州立大学が園芸療法の最初の学部資格を授与)も誕生する。

### 成長期 (1970年以降)

アメリカでは1973年にAHTA(前身はNational Council for Therapy and Rehabilitation through Horticulture)が、イギリスでは1978年Horticultural Therapy(H.T.)が生まれ、園芸療法の推進と療法士の育成を目的とする専門機関が誕生する。

治療効果のみならず、子供・老人をも含む人々からの障害を負う人々の社会的権利や生活の質の向上ということにも目が向けられ、園芸やガーデニング技術の指導を目的とするデモンストレーション・ガーデン、「香りの庭」のような視覚障害者用公園や庭園、障害者にもアクセスが可能な公園や庭園の整備などが進む。

園芸療法が社会的意義を持ち始め、「生活環境の質の向上」とか「福祉のための社会基盤整備」という点

で、園芸の果たす積極的な役割が新たに評価される。

アメリカ園芸療法協会は、任意専門職登録プログラムによって、園芸療法士の認可登録を行なっている。これは、職能審査制度で、大学でのまた専門的な訓練、園芸療法分野における職業経験、そしてその他の専門的活動や業績にもとづいた専門能力を保証するために設けられたものである。登録のレベルは、正園芸療法士（HTR）、園芸療法技師（HTT）、高等園芸療法士（HTM）、準園芸療法士（HTR-Prov.）の4種類である。1996年現在、220名が登録されている（HTR-Prov.を除く）。これらの人々が、病院、福祉施設、植物園、樹木園、保護就労所、老人ホームなどに雇用されその職能を社会的に認められている。

現在、全米におよそ300箇所あるVA医療センターのうち54箇所において園芸療法士が、他の医療スタッフと一緒に退役軍人の治療に当たり、独自の園芸療法プログラムを運営している。

### 3. 園芸療法の活躍する場所とゴール

#### （1）園芸療法の活躍する場所

園芸療法は、次のような場所で活躍している。

- 病院（精神病棟、老人病棟、青少年慢性疾患病棟、作業療法科など）
- 入・通所施設（老人ホーム、身体障害者施設、知的障害者施設など）



写真2 スペシャルニーズ・ガーデン  
（ライトン・ガーデンの1庭園）

- 教育施設（養護学校など）
- デイセンター
- 保護就労所／作業所
- 公共施設（自治体の公園、園芸協会の庭園、植物園、コミュニティガーデン、デモンストレーション・ガ

ーデン）

#### ○個人庭園

#### （2）園芸療法のゴール

園芸療法の現場では、ゴールないしゴールセッティングという言葉が頻繁に使用される。しかも、短期、中期、長期の段階的なゴールセッティングが明確に意識されている。知的障害者の日常生活訓練を例にすると、自立した生活を営むことが長期ゴールであり、日常生活に必要な基本的生活動作を身につけることが中期ゴールとなる。アメリカはサインの社会であるため、自分の名前を書くことは最も重要な生活動作である。ポトスの挿し芽をした鉢に、翌日水やりを行う際に他と区別し自分のものである目印として、ラベルに名前を書いて付けること、押し花の作品展を開催し、その作品が誰のものであるか、両親や友人が発見できるように作品に名前を書くなど、園芸活動の中に自分の名前を書けるようになるという短期的ゴールを織り込み、自然とその能力が身に付くようプログラムを進めている訳である。

園芸療法は、生活の質の向上、社会参加を最終ゴールとするが、より具体的には次の4つのゴールを目指す。

##### ①職業訓練

保護就労所や自由競争の就労所で職業として活かせる園芸技能を身に付ける。

##### ②日常生活訓練・教育

日常生活に要求される技術・技能、基礎的な学習能力を身に付ける。すなわち、社会・行動技能（協調性、責任感、自立、集中力など）、運動能力（コーディネーション、バランス）、言葉とコミュニケーション、読み書き、計算、自然の要素（天候、季節、時間）

##### ③レクリエーション／趣味

自宅の庭園の維持管理、趣味として楽しむ知識や技術、設備の改善方法を身に付ける。

##### ④リハビリテーション

身体的／知的／心理的機能の向上あるいは回復をはかる。家庭に戻っても引き続きできるガーデニングに必要な知識と技術を身に付ける。

#### （3）なぜ園芸か

前掲「（1）園芸療法の概念」で、作業療法科目の中でとりわけ園芸が優れていることを指摘したが、あらためてなぜ園芸かを整理すると次のようである。

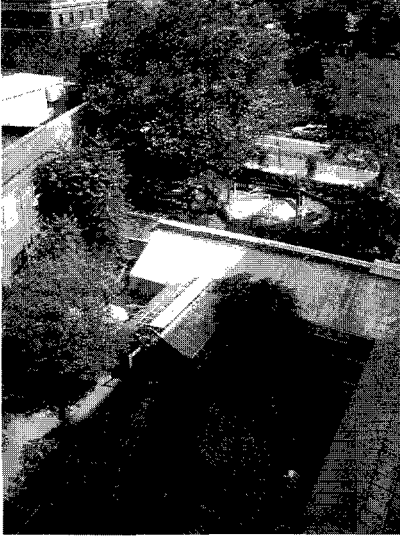


写真3 中庭とグリーンハウスと遊び場  
(ラスク・インスティテュート)



写真4 訓練を受けている人と  
トレーナーの作業風景



写真5 ブロッコリーの収穫にやってきた親子  
(カレー・コミュニティガーデン)

○園芸の新しい知識や技術を学ぶことは大きな喜びであり、これらの知識や技術の活用を通して人との意思疎通が容易になる。園芸は、喜びを持って周りの環境を発見するひとつの手段である（精神的発達）。

○一緒に活動しているグループ内では、共通の目的に向かって努力するプロセスを通じてお互いがどんな役割を持っているかを学ぶ。園芸はその人の存在価値を自覚させ、生きがいを持たせる手段となる（社会的成長）。

○園芸活動の過程で生じる、いろいろな問題を解決しながら植物を育てることを通して、責任感、仕事を達成したという喜びやプライドが得られ、自分に対する認識がより良いものになっていく。園芸という「ノーマルな（普通の）」仕事をすることで孤立感から解放され、高齢でもまだ役に立てるといった気持ちを喚起する手段となる（感情的成長）。

○園芸の作業内容は、身体機能の再教育に必要な一連の動作をすべて含む。香り、大きさ、色といった庭にある様々な要素は五感を刺激する。園芸は運動機能の回復ともあわせて、身近に出来る安上がりな健康管理法といえる（身体的発達）。

#### 4. わが国の社会の現状

##### (1) 心の健康

近年、神経症、うつ病、心身症のほか、睡眠障害、摂食障害、不登校が増加している。また、阪神・淡路大震災の際に注目されたPTSD（心的外傷後ストレス障害）などの問題が提起されている。

最近の意識調査によると、54.6%の人が調査前1カ月間にストレスを感じたと答えているが、現代社会における過大なストレスが、様々な「心の病」の原因の一つとなっていることから、ストレスへの対策を図ることが重要である。

さらに、人口10万人に対する入院受療率のトップは、循環系と精神障害が拮抗し、精神疾患による入院は多数になっている。

##### (2) 高齢社会になった日本

今やわが国の65歳以上の高齢者は1,973万人、総人口の15.6%を占める（平成9年9月15日現在推計人口）。我々は、既に高齢社会に暮らしている。

生産年齢人口（15～64歳）の総人口に占める割合は、平成7年（1995年）に69.5%で、生産年齢人口対高齢者人口の比率は4.8対1であった。この比率が2025年に

は、2.3対1に低下する。つまり、生産年齢人口2.3人で1人の高齢者を支えると見込まれている。

これまでわが国は、高齢化が進んでいても、生産年齢人口は増加していたが、今後は、生産年齢人口が減る中で、高齢化が進むという新たな局面を迎える。

ところで、「高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」(平成7年度)でみると、同好会、サークル活動などへの参加を通じて、社会との関わりを持って生活することに意欲を示す者が7割を超える。アメリカ、ドイツ等と比較しても高いものとなっている。

「高齢者の地域社会への参加に関する調査」(平成5年)によると、60歳以上で何らかのサークルや団体に参加している者は63.0%となっている。

ボランティア活動に対する興味・関心は年々高まっており、平成7年におけるボランティア活動者総数は505万1千人、ボランティアグループ数は6万3,400グループに達している。

平成9年版の厚生白書は、このような高齢社会においては、高齢者を『第2の現役世代』と位置づけ、高齢者が社会で積極的な役割を果たし、生きがいを持って生活できるような環境を構築していくことが重要である、との課題を提示している。

## 5. レクリエーションとしての園芸療法

園芸療法には、人が植物に触れ、園芸作業やガーデニングに実際に携わる、すなわち能動的に関わることにより得られる癒しの効果とともに、庭園を眺める、庭園の中で休息する、あるいは庭園を散策する、つまり受動的に関わることからたらされる癒しの効果の両面がある。レクリエーションとしての園芸療法は、この2つの要素を満たすものであり、それらを具体的に実現する場として、コミュニティガーデンとヒーリングガーデンの考え方を以下に紹介する。

### (1) コミュニティガーデン

コミュニティガーデンは、わが国で言うならば市民農園のような形態のものといえる。アメリカでコミュニティガーデンが普及する契機については、恐らくクラインガルテン(あるいはシュレーバーガルテンの呼称)がその起源となっていると考えられる。

わが国の市民農園が市街化区域内にある農地の有効活用策として位置づけられ、行政主導的に推進されているのに対し、コミュニティガーデンは、行政が関与

する場合があっても、大部分は自然発生的に、NGOベースで形成されている。

以下にユニークな2～3の事例を紹介する。

クリーブランド市にあるフェアヒルセンター・フォー・エイジングは、老人医学専門クリニックであり、オハイオ州の全インタージェネレーション・プログラム(世代間交流活動)のセンターでもある。

毎週1回、クリーブランド植物園の園芸療法サービスが立ちあげたガーデニングプログラムを行っている。

5人の高齢者と近所の2つの学校から来る10人の子供が、高齢者1人と子供2人のチームを作って参加している。

この園芸活動は、インタージェネレーション・プログラムの一環として行われているので、2世代をつなぐことを目的にしている。最初の1時間は、チームリーダーである高齢者が、植物園の園芸療法士エイミーさんの指導を受け、後からやって来る子供たちの先生となって、子供たちに今覚えたことを教える。

庭では、一年草、ハーブ、野菜の栽培(子供たちは、収穫した野菜は家に持ち帰ることができる)、野菜につく虫の勉強、ミミズと落ち葉を利用した堆肥作り。

また室内は、冬の活動の場となり、ハーブのドライ、種子蒔きして、人工照明の下で苗を育て、春に庭に定植する。

クリーブランド植物園は、このように施設でのインタージェネレーション・プログラムの指導に力を注いでいる。最初に1時間高齢者が先に作業を覚え、子供にその後の1時間、先生になって教えることによって、コミュニケーションを図ろうとするものである。

さらに、子供に教えることによって、高齢者が社会における役割を再発見し、自信を回復することにもつながる。



写真6 花壇の様子

この事例は、世代間交流活動というゴールに到達するために、施設内に作られたコミュニティガーデンをツールとして活用している。

オレゴン州ポートランド市にあるカレー・コミュニティガーデンは、ポートランド市公園&レクリエーション課が管理し、市内に23カ所あるものの1つである。市民に身体的、社会的効用をもたらすガーデニングと緑化の機会を提供することを目的とする。

それぞれのコミュニティガーデンは、市の職員とボランティアによって管理運営されている。カレー・コミュニティガーデンの責任者は、看護婦を職業とするマスターガーデナー<sup>註</sup>のオリバーさんで、有機園芸、健康な土壌作り、持続する食物生産、世代間交流活動などを奨励している。

1区画は、20×20フィート=6.1×6.1m、年間使用料は、25\$ (約3,000円)+保証金10\$ (約1,200円)、アクセス容易な高い花壇エリアの利用は、10\$ (約1,200円)である。

コミュニティガーデンが提供する主な教育プログラムは、子供のためのガーデニング、ポートランド・コミュニティガーデン友の会が共同スポンサーになっている校内及び放課後のプログラム、地球とガーデニングクラブ、子供とガーデニングをしている牧師やボランティアのネットワーク、裏庭野生生物生息地、ディスプレイガーデン及び堆肥デモンストレーション、および地元の食料危機を管理する機関への、コミュニティガーデンの余剰生産物の寄付を調整するプログラムなどである。

カレー・コミュニティガーデンには、身体的リハビリを兼ねて利用する人、老人ホームから通って来る人、子供たち、家族連れなど色々な人が利用するため、様々なスタイルのガーデニングが展開されているとのこと。通常、自分達のために野菜を作っているが、余った分はフードバンクに貯蔵して、ホームレスとか所得の低い人に提供されている。

注：1972年にワシントン州にある農事研究調査機関(CES)が創設した、マスター・ガーデナー・プログラム(MGP)により育成される園芸専門ボランティア。現在、全米48州に普及し、地域住民の園芸指導など広範な活動に従事している。

カリフォルニア州サンジョゼ市内に15のコミュニティ・ガーデン(総面積12ha)を造成・運営した園芸エキスパートのジョン・ドクターさんは、次のよ



写真7 車椅子からも利用できる花壇エリア

うに語っている。

『コミュニティガーデンを通じたコミュニティづくりは、住民が共に働き、学び、遊ぶことから生まれる。共同作業の成果に対する誇りは、経験を分かち合うことから自然に生まれる。プログラムに参加する条件の1つは、ガーデンに貢献する作業に毎月最低12時間



写真8 ボランティアが運営する  
フードバンクの倉庫

従事するというもので、人々が一緒に働くよう仕向ける有効な方法である。コミュニティガーデンとは、「栄養豊かな野菜や果物、そして美しい花を育て、分かち合える一片の土地を耕すために、人々が共に時間とエネルギーを費やす場」である。

高齢者は、いつも都市のガーデニング・プログラムのバックボーン的存在であったが、ガーデニング・プログラムの発展と運営に欠くことの出来ない重要な人的資源として、まだまだ十分に利用されていない。サンジョゼにあるコミュニティガーデン全体で40人以上のボランティアが、日々の活動の運営に当たっている。こうしたボランティアの協力やパートナーシップのお陰で、プログラムは、ガーデンの位置する近隣地

域に現実的なサービスを提供している。文化の違いを超えた理解や好感の推進に果たす彼らの役割には大きなものがある。

そのまちが健康かどうかは、バイタリティのある地域団体やグループ如何と言っても過言ではない。コミュニティガーデンは、仕事とレクリエーションが両立する安全で、美しい空間になり得る。リラックスした雰囲気やサンジョゼ・ガーデナーたちの笑顔がそれを物語っている。』

コミュニティガーデンの建設は、「人間と植物の関係」を育成するレクリエーションの1つの形であり、園芸とガーデニングがこの関係を橋渡ししている。

この事例は、レクリエーションにゴールを設定し、コミュニティガーデンをツールとして、様々な人々が多様な目的で利用できる工夫が凝らされている。

## (2) ヒーリングガーデン

ヒーリング・ガーデンとは、「人々の気分がより優れるような癒しの環境として設計された庭園」と定義される。

近年アメリカの園芸療法関係者は、庭園を眺め、そこを訪れることにより癒しの環境を提供することに高い関心を寄せている。以下の2つの事例を紹介しながら、ヒーリングガーデンの要点を説明する。

ポートランド市にある総合病院レガシー・ヘルス・システムは、現在およそ500㎡のヒーリングガーデンを建設中である。設計のコンセプトをいくつか紹介すると次のようである。

- 患者、見舞客、スタッフ、地域住民が体験し楽しめるような屋外の、人の集う場の創造。
- 屋外における患者のセラピー及びリハビリテーションの機会の提供。
- 感覚（視覚、聴覚、嗅覚、触覚）を刺激するファクターを提供。
- スズメ、蝶、ミツバチ、その他好まれる都市の野生生物を引きつける植物の選定。

このガーデンは、園芸療法ガーデン、アメリカ北西部の日陰に強い自生植物ガーデン、季節の花のディスプレイガーデンの3部分から構成されている。

設計には、だいたい9か月間かけてスペースの利用に検討を重ね、単に建築家とかランドスケープ・アーキテクトだけではなく、患者、病院のスタッフ、臨床や事務関係、またビルのメンテナンススタッフも含め

全員のチームワークで密接に関わって、デザインが出来上がった。最終的に目指すところは、利用する人達がどういうふうに感じるかにある。それは物理的な患者のニーズだけではなく、精神面や情緒面で、人々がどう感じ、どう利用するかを十分に考慮しなければならない。

さらに、病院の建物や庭園は、それを利用する患者のヒーリングのためだけではなく、病院全体のヒーリングというコンセプトを想起する必要がある。すなわち病院を利用する人が病院に到着した時に建物なり庭園を見て、そこに癒しの場所として癒しの環境を感じることが出来るかということである。それ故、庭園の部分というのは、出入りする人が癒しの環境を感じることが出来るかという意味で重要になってくる。

カナダのバンクーバー島ビクトリア市にあるザ・ロジ・アット・ブロードミードは、1995年に建設された退役軍人のための老人ケア施設である。

建物は、なるべく施設的でなく家庭的な雰囲気を出すように、連絡する7つのロジに分かれ、それぞれのロジが個別の8つの中庭を取り囲むように建っている。

この施設を建設に当たり将来入居する人に、「どういう施設が一番欲しいか」というアンケート調査をしたところ、一番が「庭」だったという。この庭園は、居住者の部屋から見える美しい景色、居住者に安全か

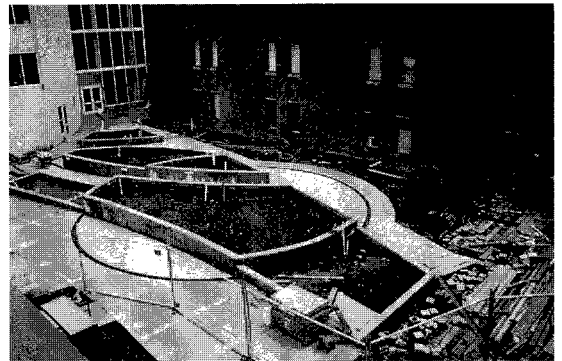


写真9 建設中のヒーリングガーデン

つ利用しやすい屋外環境、園芸療法プログラムのベース、となることを設計コンセプトとしている。

8つの中庭のテーマは、①冥想の庭、②街角、③ヒーリング・センター、④オールドファッションの庭、⑤ビレッジ・グリーン、⑥西海岸の庭、⑦コテージ・ガーデン、そして、⑧ネーチャー・ルーム：川の流れ

と野生生物をひきつける（そのための植物をいっぱい植えてある）ことで、自然との触れ合いを楽しんでもらう。水の流れに沿って園路をデザインし、水に沿って歩くということで、散歩に何か意味がある、目的があるということを伝える。アルツハイマー病の居住者のための庭ということで、手すり用のレールを取り付けている。これらの庭園は、イギリス人の造園家であり、園芸療法士のポールさんが設計したもので、彼は次のように語っている。

「庭の設計をする際に、家族とか患者とかスタッフの方とかいろいろな方、その庭と関わることになる人たちに設計に関心を持ってもらうことが大切である。そこで、皆さんに意見をもらうためアンケート用紙を配った。庭の設計に必要なのは、観賞用なのか、作業用なのか、歩くためのものなのかという用途に応じたテーマ設定である。

庭が、セラピューティックになり得る、癒しになり得る条件は、「ユニバーサル」であるということだ。ユニバーサル・デザインとはどういうことかと言うと、特別、高齢者のためとか子供のためというんじゃなくて、家族全体で楽しめるような、地域の人全体で楽しめるようなことを「ユニバーサル」と考えている。そして、庭を利用する人たちの間に話題になり得るような、いろいろなストーリーをデザインしてあげるということでもある。自分たちが育った古い思い出とか、現風景とか、例えば、レールの向こうにカナダの農場の柵なんかを使ったりして、思い出すことができるような要素を入れる。」

## 6. おわりに

レクリエーションと緑地づくりを「癒し」というキーワードによって結び付けるときに、園芸療法というツールがどのように関わりを持つことができるかについて考察することが小稿のねらいである。

わが国は、高齢者、障害者が多数を構成する社会へ急速に変貌を遂げつつある。このことはレクリエーションを必要とする、緑地を利用する主体が高齢者、障害者へシフトしていくことを意味する。

第2の現役世代を構成する高齢者の、蓄積してきた知識、技能、社会活動への参加意欲を引き出し、大いに発揮させるゴールセッティングに対し、園芸療法の能動的側面が大いに役立ち、コミュニティガーデンという場において、インタージェネレーション・プロ



写真10 庭園の1つNature Roomを  
散策するアルツハイマー患者

グラムというソフトを通じて、第1の現役世代に継承されていく。

そして、積極的参加が困難な人々、あるいは現役をリタイアした人々が、日々の時間をのんびりと過ごし、生きがいや明日への希望など、生活の質を少しでも高める意欲を生み出すゴールセッティングに対し、園芸療法の受動的側面が機能を発揮し、ヒーリングガーデンを通じて、人々は様々な癒しを享受することができる。

コミュニティガーデンは建設に参加する意志のある人がいれば、どのような場所へも自在に多機能なものと作ることができる。ヒーリングガーデンは、病院、老人福祉施設、高齢者住宅団地、あるいはリクリエーション・リゾート施設に今後求められる重要な場所といえる。